



夕口



泰然自若

まったく、この都市はダメだな。何がダメかと言えばみな顔が暗い、それでいて切羽詰まっているような緊張感を張り付けている。これでは城壁に囲まれた都市の中では、息が詰まるというものよ。久しぶりに訪れてみればこの有り様だ。

昔は活気に溢れ、人々の歓声がそれはもう煩いと思えるほどにこだましていたのだがな、時代も移り変わったと言う事か。何とも世知辛いものだ。

鼻を突き刺す悪臭もところどころから湧き起こり、糞尿が溢れている。それを気にする風もなく、跋扈し、それらを片づけようもしない居住区。商業区の生ごみもそうだ。あれらは土に埋めれば大地に消えてしまうし、大地も元気になるというのに、石の大地に振り撒いて、いったい何を育てるといふのだ。

この臭いか、このにおいが今の流行なのか？ まったくこの都市に住まう者の美的感覚にはほとほと感心するよ。

それにだ、よそ者への風当たりも強くなった。まるでここは自分たちの縄張りだと主張せんとばかりに排他的になってしまったものだ。お前もそう思うだろう。

繋がりがあるかこそ、人は強いのだ。人など個人では脆弱という言葉でもまだ生ぬるいほどだ。実に弱く、実に脆い。そのような人が他者を恨み、蔑み、排除しようと動くなど、自身の首を絞めているとは思わないか？

まったく、この都市は変わったよ。

ふむ、近頃は疫病が蔓延（はびこ）っているのか。それは知らなかった。そうか、それゆえに壁の外から来る者達を警戒しているのだな。

思えば浮浪者も見かけんな、おおかた奴らも疫病を運ぶ使者とみなされているのか。難儀な事だ。浮浪者全てが怠惰な者ではないというのにな。浮浪者になるべくしてなった者はもちろん救いはない。矯正院に入れて怠惰を矯正することも必要だという考えも一応は理解できる。が、全ての浮浪者がそうあるべきだとは思わんぞ。お前もそう思わないか？ 五体満足の若者ですら浮浪者となってしまっているのだ。それらを一緒くたにして処理するなど間違っている。

働きたくとも職のない若者が村から村へ、都市から都市へ旅をすることは良くあること、しまいには国から国へという事もある。この国の全容は俺も知らないが、それでもここよりは栄えている都市はいくつかあるからな、そういったところに旅立つ者も居る。

しかし疫病が流行ってしまえば、旅人は疫病に取りつかれているかもしれないという疑心によって排斥される、か。

冒険者として、それは似たようなものだろう。彼らもまた旅をする者たちだからな、まあ浮浪者よりも荒事に慣れている点では性質が悪いことは確実だろうて。

疫病によって外部からの人を規制、あるいは蔑むか。哀れだ。そのような行いも、お前は仕方ないの事のように思っているだろうが、都市人は努力を忘れてるぞ。

判るか？ 努力だよ、努力。なぜ疫病が流行る原因を考えない。多くの人が死に絶えているに

も拘らず、学者くらいであろう、原因を探る者は。なぜ他者は考えん。住んでいる場所を追われるかもしれないというに、自分が死ぬかもしれないというのに、周辺の土地で流行っているのになぜ他人任せにできる。身近なところでちょっと考えてみる、頭をひねるということすら忘れてしまっているのだろうか。

まったく嘆かわしい事だとは思わんか？ 人は知恵を持つからここまで栄えたのだ。考える事を止めたのならそれは他の動物と一緒にだと言う事に他ならん。知恵を持つから人なのだ、二本足だとか手先が器用とか、衣服をまとうとか関係ないだろうに。

何をする。男に抱かれる趣味はないぞ、離せ。お前の世間話につき合っただけだ、決してお前に気があるとか、誘っていたわけではないぞ。

ぬ、そうか.....俺は怪我をしていたのか。

いやなに、気にするな、これくらいかすり傷、俺の魔力で簡単に治る。

くそ、お前、想像以上に過保護に接する奴だな。まあ、仕方がない、そこまで世話を焼きたいなら俺も大人しくしよう。恩を売られるのは癪だが、悪い気は起きんからな。思うままにやってくれ。だが、痛い事は勘弁だぞ、良いな。

お前、中々に手際が良いな。ほう、慣れておるのか。ならば俺も安心してお前の治療に身を委ねられるというものだな。

おお、そうだった。すまぬな、俺の名前はクロノスだ、キョースケよ。

お前の名は独特だな。流れる風のようにさらっとしているかと思えば、言葉自体に急かされているようにも思えてくる。む、表現に苦しむが、とにかくお前は面白い名を持っているということだ。

それにしても、お前は何故俺を助けたのだ。助けられた側から言うのもなんだが、えらく物好きなことをしたと思うぞ？ お前は言っていただろう、疫病が流行っていると。

ふむ、ほっておけなかったとのたまうか。お前は馬鹿か、よほどのお人よしだな。

まあ、助かったのは事実、礼を言おう。

あのような仕打ちを受ける羽目になるとは思いもせなかったからな。あのままであったなら、俺は怒り狂って、もうこの都市に出入りすることもできなくなるどころだった。

まったく店の物品を壊したのは俺ではないというのに、たまたま目に止まっただけであれほど俺を犯人と決め付けるとは何と横暴なことだ。お前もそう思うだろう。

お前が証人かつ、その店で品物を買わなければ、俺は捕まっていたであろうからな。

それにお前に助けられた後も憤っていたものだが、お前の話を聞いて怒りの矛先を変えることができた。それも含め、感謝しているぞ。

しかし、何処でこのような怪我をしたのか、俺も歳だということ……など考えたくない話だ。

お前はなかなか見る目がある男のようだ。こうして出会えた事も何かの縁かもしれないぞ。それに珍しい男だな、キョースケよ。地毛は黒であろう？ 奇特な男だ、いや、仕方ないとみて髪色を変えたか。

む、お前の事を心配しているのではないぞ。だがな、お前の黒は珍しいという話だ。勘違いするなよ。

その黒ゆえにお前も判っているだろう。黒は奇異の目で見られ気味悪がられてしまう、あるいは呪いの子と言われても不思議ではないからな。だからこそ、お前も色を変えたのであろう。違うのか？

ん、お前は冒険者になりたかったのか。ふむ、冒険者か。憧れることに対しては俺も同意しておこう。やはり世界を求めるといのは面白い。しかし、やめておけ、冒険者などという乱暴者の仲間になる必要はない。

お前はなかなか見どころがあるからな。そうだな、パン屋にでもなればそれなりに繁盛しそうな雰囲気を持っているぞ。お前がパン屋になれば、俺も食うに困る事はなくなるかもしれないし、都市へ来る口実にもなるな。

退屈な時は遊びに来ることもできる。まあ、パン屋といっても大変な仕事である事に変わりはないがな。生活に必要な食を司る仕事だ。信用も実力も伴えば、自分は清廉であることも証明し続けなければならないからな。

飢饉など起こればパン屋など目の敵にされるだろうからな、もっと安くしろだとか、隠し持っているのではないか、とな。まあ、それらを含め、お前には向いているような気がしたのだ。

しかし、なぜお前のような男が冒険者になろうなどと思ったのか、見てくれは世辞にも良いとは言えんぞ。お前、剣はおろかナイフも握った事はないのではないか？ ましてや殺生なども、まあ、理由などいくらでも転がっている時勢ゆえに、お前も何かあったのだろうことは容易に想像は出来るがな。

む、話してくれるのか？ おやおや、独白か、まったく困った男だな。

ふむ、力を求めるか。いや、求める理由は当然だ。友を死なせてしまったのなら尚のことだ

、それを悔やみ、強くなろうと決心するお前は、求める権利を持っていると言って良い。だから、泣くでない。俺はお前を慰める言葉を持たん。

お前が何者かによってこの地に攫われた事も不憫だと思う、黒髪ゆえなのか、お前の家が裕福だからなのかもしれない。そして、そこから何も判らない土地で食うに困り、盗みを働いた事も、悪であるが情けを掛けられてしかるべきではないかと、俺ですら愚考はする。

だが、だがだ。お前が人を殺した事に変わりはない。その事を忘れようなどと思うなよ。それは、一生お前が忘れてはいけないことだ。たとえ、裏切られたとしても、激昂し、その感情に操られ相手を刺し殺すなど、お前は決して忘れてはいけない。良いな。

まったく仕様のない泣き虫だ。そんなに泣きたいのならばもう止めん、今は好きなだけ泣くが良い、お前ならば忘れる事も無く、前を向く事が出来るだろう。

俺はお前を慰めたわけではないぞ、ただお前が勝手に泣いてしまったから、仕方なく傍に居るだけだ、判ったな泣き虫小僧。

ほう、痛みは残るが違和感はない。慣れているという言葉に偽りなしか。さすがだと、褒めておこう。白状するが、それなりに大事だと思っていたのだが、これならばさほど痛みもなく歩くこともできるだろう。

ほら、涙を拭え馬鹿者め。なんで俺が泣き虫の世話までせねばならないのだ。

背筋を伸ばしてみろ、力を求めるのならば尚の事だ。まったく、そうだ。俺に慰められているわけではないだろう。

いや、俺はお前を慰めたつもりもないぞ？

まあ、仕方がない、そう思うなら思っておけ。よし、それでいい。

おい、こら、待て。まったく、お前という奴はどうしてこう過保護なのだ。それにな、俺はお前のものではないのだぞ。

こら、離せ、頭を気安く撫でるな。まったく、世話の焼ける男だ。しかし、面白い男でもある。馬鹿にしているのではないぞ、評価しているのだ。お前の事をな。

それで、お前はこれからどうするのだ。宿に戻ってまた冒険者になるか悩むのか？ 実に馬鹿らしい行動だとなぜ思わないのか。

おい、待て、待てと言うに。まったく、おい。そんな顔をするな。

日はまだ高い、今から都市を立てば夕暮れ前にはたどり着くだろう。

どこへ連れて行くんだ、だと？ お前は力を求めているといったはずだ、助けられた恩もあるからな、少しばかり世話をしやろうと言うのだ、有り難く付いてこい。

付いてこいと言っているんだ。

ああ、そうだ。お前を案内してやる。だから付いてこい。これは、ちょっとした恩返しみたい

なものだ。とっと来い、馬鹿者が。

よし、それで良い、素直が一番だ。

おい、こら、やめろ。抱きかかえるな。男に抱かれる趣味はないといっているだろう。

何？ 同じ黒だから仲良くしようだと、馬鹿な事を言うな。俺は黒猫でお前は黒頭じゃないか。まったくの別物だ馬鹿者が。

<了>